

18歳 脊椎の手術を受ける
23歳 初めての異国への長旅
49歳 10歳年下の医師と結婚
72歳 死去

vol. 6

イザベラ・バード

Isabella Bird

持病を患いながらも あえて困難な道を選び 旅先でのリアルな体験を発信

人生はよく旅に例えられるが、人生が思い通りにいかないように、思い通りの旅というのも難しい。ましてや、困難な旅先を選んでいれば、なおさらのこと。それでも、自分自身に挑むかのように、困難な道を選ぶ人がいる。

▶▶▶ 治療の一環として始めた異国への長旅

旅行家であり、随筆家でもあったイザベラ・バードは1831年、イギリスの良家に生まれた。父は当時植民地だったインドで弁護士をしていたが、コレラで妻子を亡くし帰国、牧師へ転身後に再婚した相手がイザベラの母である。イザベラは教養ある両親から文学や歴史、語学、植物学などを教わり、さらに興味をもって独学でもさまざまな分野について学んだ。

幼少時から病弱で、長年脊椎の持病に悩まされていたイザベラは、18歳の時に手術を受ける。だが、痛みは取れず鬱々としていた。その姿を見て、医師が勧めたのが長期の旅である。この時代、非日常である旅を治療法の一つとすることは、珍しくなかったようだ。

イザベラが初めて単身で長旅に出たのは23歳の時、7カ月をかけアメリカ大陸を旅した。帰国後、旅先で書いた日記や家族らに宛てた手紙をもとに『イギリス女性のアメリカ紀行』を出版すると、評判を呼ぶ。現地で見にした風景や、人々のリアルな暮らし、文化、身をもって体験したハプニングなども含めて生き生きと描かれた紀行文に、読者も追体験しているような気分になれたのかもしれない。この旅を通じてイザベラ自身、新しいものの見方を獲得し、体調も改善している。



1831年生まれのイギリスの旅行家、随筆家。本名はイザベラ・ルーシー・バード。世界各地の辺境地を訪れ、多くの旅行記を出版。その功績によりヴィクトリア女王に謁見し、女性初の英国地理学会特別会員にも選出されている。

随筆家として認められたイザベラは執筆活動を続ける一方で、異国への旅をライフワークとした。旅と言うよりもむしろ冒険であり、2000m級の山麓や火山口近くで野営したり、世界の辺境地に足を運んだりしている。

そんな彼女が日本を訪れたのは1878年（明治11年）、アイヌが暮らす蝦夷を目指して東京を出発するのだが、あえて難所が立ちだかる陸路を選ぶ。日光から会津街道を通して新潟へ抜け、東北から蝦夷へと向かう道は、西洋人にとって未踏の地だった。日本人にとっても険しい悪路で、その上6月から9月という時季である。高温多湿のなか持病の痛みを抱えながらの旅となった。

▶▶▶ 愛する家族を失い、絶望の淵へ

旅先でのイザベラは、イギリスで平穏な日々をおくる3歳下の妹に向けて手紙を書くことを常としていた。二人姉妹で心の支えにしていた妹をチフスで亡くしたのは48歳の時。26歳で父を亡くし、34歳で母を亡くしていた彼女は一人残され、絶望の淵へ立たされる。そんな彼女を支えたのは、以前から求婚されていた10歳年下の医師だった。49歳で結婚するも、試練は続く。翌年、夫が細菌感染症の患者を治療し自らも感染、病床に伏す。イザベラの介護の甲斐もむなしく、結婚生活はわずか5年で夫の死をもって幕を下ろした。

その後イザベラは72歳で亡くなるまでの18年間、執筆と旅を続けつつ、愛する妹や夫の名を冠した病院を設立し、看護法も学んでいる。病弱だった少女は、あえて困難に挑むことで人生の可能性を広げ、最後まで生き抜いた。

(執筆/ライター 篠田りょうこ)